

『ランドスケープデザインのがかり』

宮城俊作（奈良女子大学教授・プレスメディア主宰）

コメンテーター：高木 明（都市デザイン委員会委員）

出身は関西ですが、東京と京都で半分ずつ生活していると云う中で、実際の仕事は全て東京でやっている。比較的自分のやってきた仕事の中で街づくりに繋がりが深い部分を引っ張り出してお話をさせていただくと云うことなので、話を引き受けたしだいであり、もっぱら自分達の事務所で行ってきた作品をご紹介しますことになるかと思います。

私は大学の肩書きもあるが、基本的にはランドスケープアーキテクチャーと云っています。。どちらかと云うと、これまでランドスケープを中心にしているが、アーバンデザインの分野でもやっており、建築家とのコラボレーションもやっている。

「手がかり」

手がかりを見つけるのはなかなか難しいのがランドスケープであり、逆に手がかりがないと出来ないのが、アーバンデザインであると思う

取り組みの主要視点

建設 (Construction) から顕現 (Scaping) へ
我々は、建設を技術として利用するが空間としてはスケーピングなものにしたいと考えている。

自然象徴的な形態 (Nature Symbolism) から生態象徴的過程 (Eco Symbolism) へ
形ではなくプロセスにデザインの中心を据えた取り組みをしたい。

「ランドスケ - プとは、我々をとりまく環境のある状態・状況をさし、その状況のもとにおいてデザインという行為が表象するものと表象が志向するものとの間に我々の知覚を媒介としてコミュニケーションが成立していること。」このように考えている。

「造園 (Fiton) からランドスケープの (Reality) へ」
ことばで定義するのは難しいが、表そうとしているものが何に向かっているのかを考えると、5感を媒介として考えたい。

東京の飯田橋の駅前の「ラムラ」と云う市街地再開発ビルがある。ここでは、上部公開空地が作られ、非常に美しく作りこまれている。しかし、この下は神田川で非常に汚く、汚染され、夏はくさくて近寄れない、そういう水質のところをフタかけをして美しいランドスケープがされている。私は上の空間が悪いと云っているのではなく、一種の造園であが、一種のフィクションであると考えていいと思っている。

先にフィクションからリアリティーへと云ったのは、私達の目指しているのはフィクションの造園ではなく、下

の水をどうゆづ形で上に引っ張り出すかと云うランドスケープの総体としてどのように作り上げてゆくかであり、それは決して心地よいものにならないかも知れない。ただ下に起こっている事を「隠蔽」して、上でこづゆとをすることは、私達はめざしていない。今話したようなことを心の底にもちながら仕事をしている。

< 飛騨高山美術館 >

この作品は単体の建物に対して屋外がどう造られるかと云うあたりを見てもら



鳥居園より見る、ランドスケープはプレイスメディアによる設計。

おうと云うもので、非常に伝統的な街で、アールヌーヴォとアールデコのガラス工芸品と家具を展示するミュージアムを建てるというプロジェクトで、建築は鹿島デザインの江幡修氏 (鹿島の設計施工で、私のアメリカ留学していた時の同級生) がやっています。

我々は、その周辺のランドスケープを担当した。高山はものすごい数の観光客がくる土地である。そこにはかなりの数の来館者を誘致するミュージアムの計画であり、当然、車の駐車場、バスの駐車場が面積として大きな比重を占めることになる。敷地は駅を挟んで伝統的な市街地の逆側で高い丘の上で、我々が仕事をはじめた時はすでに造成が終わっており、木は切られて、丘の上が真平らにとばされている状態で非常につかりしたことを覚えている。

そんな中でかなりの台数の駐車場を捌かなくては行けない。面積的にはどうしてもそのような台数確保することが必要であり、我々が考えたことは、これをランドスケープして、駐車場を庭にするパーキングガーデンみたいにしてしまうという考え方をした。何もフラットである必要はないだろう、もちろん排水のために必要な勾配があるが、もっと6~7%付け、丘のランドフォームを若干再生させながら大きくむくみのあるような駐車場を作ろうと考えたものがこれである。

こうして写真を見るとほぼフラットに見えるが、実際は5%ぐらいの勾配がずっとついていて、その中に曲線を使った植え込みとかレンガ等の堅いものを使って曲面を出そうとしている。例えば車止めの縁石

もなるべくコンクリート製にものを使わず、石を使うとか、白線の変わりに、こぶ出しの御影石を使うとか云う仕掛けは当然しています。

秋になると紅葉が見え、今、おそらく緑もボリュームあるものになっており、どちらかと言うと林の中に車を止めたと云う感覚になるのかなあとと思っています。

舗装の色もかなり落ち着いてきており、今ぐらいが一番良いのかなあと思います。

ご存知のように我々の仕事は、一方で技術としては造園とか土木の部分を色濃くもっている。これは入口のところに植えたシナの木の本立のものであるが、これは、青森まで行って現物を見て決めたものである。当然材料検査というものが非常にデザインの上で大きなウエイトを占め、現場の監理がどれくらい出来るか最終的なものの出来を決めることとなる。ただ、我々の仕事の約半分近くは土木仕様で発注されることとなる。そうすると、監理という仕事がなく、出来てしまうものに大きなギャップを生ずることとなる。これをなんとかしなければいけないと私は常々思っていますが、なかなかうまくいかないのが現実である。

実際公共事業もたくさんやっていますが、何とかして監理が出来るような道筋をつけようとやっています。随所に造園的技術を我々も入れているつもりですが、それは一つには伝統的なものを大事にしなければいけないことを我々も非常に痛感しており、石を組む職人をどうゆうふうに通じてもらうかと云うことも含めてしっかりしたものを持っていたいと思っています。

さらに、室内から既存の樹木を部分的に切ってもらって後ろの北アルプスが陸線として見える工夫などしている。いわゆる、ピスタカッティングして、市街地のいやらしいものを少し隠すという景観の見切りぬような効果を出そうとしています。

< 長峰集合住宅 >

2 つ目は多摩ニュータウンの稲城長峰の集合住宅地、11 ha 1150 戸のスーパーブロックの住宅地のランドスケープです。建築は公団の東京支社がいくつかの設計事務所に発注して行ったもの、最初の配置計画は市浦事務所でやられたと思います。

ここは稲城高陽台と云われており、うしろに高層があって、中層と戸建があるという全体のボリュームプランになっており、完全にスーパーブロックとなっている。

ちょっとやっかいであったのは、公団の賃貸と公団の分譲と都営住宅が同居すると云うプロジェクトであり、住む人の属性が全然違う人達が混在することである。ただスーパーブロックであるので、我々のこの大きさのスケールメリットを無にさせる配置計画は困るということを散々言って、最後は結局住棟の配置、通路の

線形、駐車場の配置までやった。そういう中で中央に非常に大きなグリーンをとりました。

結局これを媒介として、ここはトラフィックフリーですから、色々の人々が色々の使い方が出来る。ここには我々は手を出すことが出来なかった 2 つ街区公園が入っている。これを全体を 1 つの大きな緑の固まりとして繋いでいこうと云うことを考えた。

ここでは分譲と賃貸との間には絶対、柵を作っではいけないという事として公団が管理する共同部分の所と分譲の管理組合が管理するところの間は側溝の縁石で切るというやり方をした。それでちゃんと境界が判ればよしという考え方で全部がつながっているように見せたい。

非常に大きな芝生のスペースを設け、少しマウンドアップし、部分的にプレイロットも入っている。この頃は遊具のデザインも全部オリジナルでやれた時代で、設計期間もそれだけ潤沢にあったんだと思います。もちろんコストのこともあります。

ちょうど環境共生なんかも非常に大事にしると云われていた頃であり、今もそうですが、側溝も透水性のアスコンを使った舗装で、側溝は流すんでなくて浸透性の側溝にしようとする事で芝生の下に砂利を敷いている。その砂利の上に土をのせて、芝生をおくという方法をとっている。もちろん、勾配がついているから流れてしまわないように、所々に石の止めを入れるやり方をしている。見学会に来ていただいた建築家の人に云われたのだが、面白いけれども中景がない、中景が抜けているじゃないかという事を云われた。それを聞いたとき我々は嬉しかった。我々は最初から中景を抜くことを考えていたからである。

空間のスケールの問題から云うとやはり遠景、中景、近景がきちりと全てのレベルで作り込まれていることが良いデザインであるという考え方もあるが、ここではそうじゃない。ここで、いくら中景を作ってもあれだけ大きな建物があの間隔で入ってきた時に果たして中景が中景として認識されるかという事について非常に疑問を持っていた。

かなり色々なサイズの模型を作ってスタディーした結果やはり中景はやめようという事で作り込みをやめて大きい空間のスケールと足元に来た時のディテールで空間を作るということにした。中景は何なのかと云うと、中景はあの広い広場に人が集まって人々がいろいろ活動する様子が中景となって見えれば良いという考え方にたち、これが現象的な過程と考えて、我々は作るうとしたわけである。

< 足立区新田住宅地 >

もう一つは足立区の新田地区と云われる住宅地で、

東京都の北区、足立区の境のところでも隅田川から荒川に分流し、挟まれた新田地区である。東亜スチールという鉄鋼メーカーの跡地に都市基盤整備公団の土地有効利用本部の事業で、住宅地開発となった。

国土交通省(当時の建設省は)ここにスーパー堤防を作る計画をずっと持っており(荒川のスーパー堤防)そのスーパー堤防の上に来る住宅地がこの新田地区の住宅地計画となる。この辺りはひたすら洪水の多いところで、荒川の上流で雨が降るとこの辺りに溢れるとっても条件としては良くないところである。

ランドスケープのデザインを考える上での歴史は非常に大事な要素であり、土地の記録をどのように取り込んでいくかという事は大事な要素になっていくわけである。これは大正時代、荒川の堤防で行われていた花見の風景であり、新田桜堤みと云う風に云われていました。五色桜といわれる八重桜のように少し遅咲きの桜がたくさん色々の種類が堤防上に植られており非常に有名な花見の場所になっていた。今度のスーパー堤防の中でやっぱりこゆうものを再生させていく事は大事であると考え、これをメインに据えた計画にしようとした。

新しい地区構造をどう作るかということを考え、荒川の河川の環境軸、構造軸を延長・分岐し、うまく荒川と隅田川をつないで、それを規制市街地の中に持ち込むようなオープンスペースの構造軸を作れないだろうかということ考えた。

要するに団地が出来ることにより、この新田地区といわれる島状になったところの全体の環境構造を変えるという再編成するというきっかけとなる、その一番最初の空間をどのように作るかということがだと思ふ

ご存知のように公団は今難しい状況におかれており得た土地の上でどのように事業展開するかということに対し色々選択肢があるわけで、今東京の方では「パートナー賃貸」とか「定期借地権を設定して民間事業者がその借地権を獲得し、その上で事業を行う等のスタイル」が段々メインになっているのかなという気がしており、全てをコントロールできる状態にはなっていない。この辺りについては公団の事業としてやっているが全体の中で、どれがどうなるのかこの先予断を許さない状態である。

荒川と隅田川の間の中で、川と市街地をつなぐ大きな緑の軸となる空間を作ろうとしたもので、堤のスーパー堤防上の巾 27mの歩行者専用道路ならぬ団地内の園地を作り、桜並木を再現し大きな緑の軸を作り市街地と荒川をつなぐ。更にこの辺りで公園と学校が計画されているのでそれをつないで隅田川と引っ付けると云う関係を持たせようとした。

この中央の空間は緑道でも歩行者専用道路でもなく、いわゆる団地内の園地である。これは、きれいな円弧を描くラインでゆるやかな 2.5%から 3%勾配ですと上って行って最後に堤防にたどりついて、前がぱっと開ける構成を作ろうとした。

< 幻の愛知万博計画 >

幻の計画となったが、2005年愛知県の瀬戸市と豊田市と長久手町を会場に開催される「愛知地球博」の会場計画を最初に行った計画です。

最初の会場の予定地であった「海上の森」といわれる瀬戸市の東南部にある丘陵地のちょうど真ん中辺りから瀬戸市の市街地を見た写真である。なんのことはない関西地方から「周伊勢湾」といわれる伊勢湾を囲むエリアの特徴的な植生が優先しているエリアです。

これは会場予定だった場所の 1948 年のアメリカ軍がとった空中写真と右側が 1996 年我々が計画をはじめ直前にとった写真の比較である。これを比較するとほぼ 50 年前にここにはほとんど市街地がなかった。撮影時期も大体 6 月か 7 月でほぼ同じ季節で戦後(1948 年頃)のすぐは会場の予定地ははげ山であり 1996 年頃は緑が回復しているということである。

これはどうしてかと云うと瀬戸市は焼き物で有名な地域であり、焼き物にはどうしても燃料が必要で、ここでは 7 世紀から焼き物が行われていたが、一番盛んになりはじめたのは平安時代で、それから延々木を燃料にして焼き物をしてきた。そうすると、当然遠くから選ぶわけにはゆかないから廻り山もちゃんと手入れをして樹木を管理して、そこから燃料を確保して焼き物を作るということをやっと続けてきた。

その後、燃料の変化にあわせ、丁寧に手入れしてきた山を放棄するようになる。木を切った後も植林しないで放ったらかしにするという状態が長く続くとした結果、山は「裸地化」し、下流で洪水が起こるとい事が頻繁になる。

明治末頃から治山事業をかなり集中的に行い、今でも山の中に入ると治山堰堤とか砂防堰堤があちこちにあります。結局このような人工的なものを作り植林を一方で行う中で今のような状態に戻ったわけである。もちろん戦後は拡大造林が行われ、県有林で檜の植林が行われたが、結局ほったらかしになっている。

結局、今このエリアの生物の多様性、自然の高さというものは自然が作り上げたものであるが、そこにはものすごく人間の手が入っていることが判るわけである。

そういった場所で、年間 6 ヶ月の開期で 2500 万人の人を引っ張り込むという計画です。隈さんと 2 年間ぐらい討論し、後退に後退を重ねてようやくある程度目

途がついて発表したのがこの計画案である。その後檜玉に上がり国際的な批判を受け地元の反対派との軋轢などいろいろあったりして協会そのものの組織が大巾に見直される中で首をはねられたという縁がある。

この時考えていたことは今まで我々が考えていた博覧会は更地に仮設のパビリオンを建てていくものであった。しかし、そのようなものでないものとするべき考えた。もちろん博覧会ですから仮設にならざるをえないが、だが仮設のものをどけた跡に何が残るかということを考えて計画を作ろうとした。

隈さん自体は全体をデッキみたいなもので谷筋を覆ってデッキの下に建物を入れる、又は上に部分的に出るといふ考えを持ち、それと山をなじませて全体の会場計画をするという方向を示した。我々はその中でたくさんの人々を、例えばお年寄り先子供も体に不自由のある方も積極的に森の中に入り込めるような、そういう装置を作ろうとした。

等高線に沿って水平回廊といわれるものを幾層か作り、そこをずっとめぐりながら、様々なものを見て感じることが出来る。そのような仕掛けを作ろうとした。基本的には同じ等高線の高さに沿ってますのでフラットな面を歩いてゆけることとなる。

その途中に仮設の幕構造のドームのようなものを置いてみるとか、いろいろのことを考えてました。この通路そのものは木を切らなくても土地を造成しなくても順番に作り進んでゆけるシステムを開発して、一応実験もやったということまでいきました。

結局、何を考えていたかと云うと、隈さんと東大の広瀬隆道さんという方(バーチャルリアリティーの専門家である)で、眼鏡をかけてその眼鏡にマイクロGPSで電波を飛ばし、そこである環境についての情報を外から入れる。そうするとかけている眼鏡のスクリーンに全て写り込むということにより実際のリアルな環境の中に重ね合わせて見えてくるという様な事を考えた。おそらく2005年には充分実用可能であろうという技術と一緒に入れ、とにかく物を作らずに空間、環境が体験できるようなシステム、そのようなツールだけを作ろうとした。もちろん必要最低限のサービス施設は入っている。そういった中でトンネルもあるし、切通しのところも部分的に出てくるわけでこれが自然破壊だと言われた。

海上の森から直線距離にして1km程度のところで起こっていることで、瀬戸物に使う陶土、釉薬に使う珪砂を掘り出しているところで、この地域にはこのような土取場所はいたるところにあり、グランドキャニオン状態である。反対運動をする人は、この土取りのようなことは一言も云わない。

我々はこのような状態環境を将来にわたってどのよ

うに変えて行くのか、自然をどのように復元するのか、そこに市民がどう関わっていくのか、という事も含めた実験をやらなくてはならないという事を主張してきたが、なかなかそうはいかなかった。やはり日本では若干時期が早かったかなという感じがしている。

ただ、ヨーロッパでは、もう当たり前のことになっていると思うが、両者は同じ問題です。この問題を同じとして、捉えられないような社会構造は少し遅れているのか、という気を持たざるを得なかった事がこの仕事を通じての感想である。

< 平等院・浄土庭園・州浜 >

今年お寺の開宗から950年目の記念の年に当たります。お寺は今年を目途として1つは浄土庭園の復



東側の阿字池から鳳皇堂と宝物館入口部分(左奥)を見る。

元整備事業をやろうとしている。それからもう一つ新しいミュージアム(宝物館・鳳翔館)を建てよう云うことでこの2つの事業が繋がっているという事になります。

浄土庭園の整備は平成2年から始まったお寺の浄土庭園の発掘に始まったものです。平安時代というのは奈良時代の大陸からの影響を受けていたその芸術文化、建築も含めてですが、日本的な方向に大きくシフトした時代である。しかし、残念ながら今建物と庭園がセットとなって平安時代のものが残っているのはここだけです。

随分前に亡くなられた日本庭園史の「森蘊」先生なんかもしきりにおっしゃっておられた事であるが、是非とも発掘調査をしてみたいとずいぶん前から云われていた。ようやく今年が950年という事で、それに合わせて10年ほど前からやってみようという気運が高まり、始まったのがこのプロジェクトである。やはり思っていた通り、お堂の前から池上向かって緩やかな「州浜」といわれている握り拳ぐらいの大きさの石をびっしり敷き詰めた浜辺がずっと池になだれこんでいた。

それが池を経て一旦盛り上がり、宇治川の堤防になり川原につながるという構成がほぼ確認されたわけである。この発掘の成果に基づき、復元的整備が行われたのが、平成9年からである。

池の水を抜いて「州浜」のところを整備したわけで、当然平安時代の遺構は貴重なものですから、手をつけずある厚さの粘土を敷いて保護をしてその上に「州浜」を再現する方法をとった。この時に使われた工法

が京都の鳥羽離宮で(これも平安時代のものですが)見つかりました工法を使いまして、「洲浜」である程度の勾配をもっているのがずれる可能性がありそのずれを止めるためにグリッド状の大きさに石を組んで大きい石を木槌で粘土の中に打ち込む。これを手がかりとしてこの上に石を並べて行くと、そうするとこのグリッドの中に入っている大きい石でずれが止まるという仕掛けがあります。これが実際鳥羽離宮で発見された工法ですが、ここで再現的に利用しています。これが出来てから(これまで粗礫積みの石の護岸であったが)以前と違う波の立ち方がするという事を聞いて非常に面白い現象であった。

鳳凰堂の背後、北側を見ている写真であるが、中島と橋が2本(これも関白藤原頼通の日記(御堂関白紀があるが)の中に平橋、反橋を渡って堂内に入ったという記述が何回も出てくるわけです。室町時代の絵図にはこれが書かれていた。ただ、どの位置に橋がありどの位置に中島があるとかは全く判らなかったのが、発掘して柱の位置も全部きれいに出てきた。それに基づいてきちっと作り上げましたが、高欄のデザインだけが判らなかつた。ただ、鎌倉時代の絵図に出てくるものを元に復元しました。これはこの意味で、復元的整備であるといえる。

< 平等院・景観スタディ >

景観スタディの話ですが、これは京都でも東京でも同じような事が起こっています。ただ、ちょっと見過ごすが出来ないような部分を含んでいましたので、合わせて仕事としてやったものです。

鳳凰堂の右側の方に高層のマンションが見えていると思いますが、実は平成6年にここが世界遺産に登録されました。平成6年に登録された時はあのマンションは建っていなかった。後で調べてびっくりしたのですが、周りに3本の10階以上の建物が建ち、2本が平等院から見える状況となっている。

この周辺は当然風致地区がかかっています。ただ何故かこの高層建築物が立っているこの地区は宇治市での唯一商業地域に指定されており、建蔽率、容積率は80%、400%であり400%の容積率は少し大きい敷地だためちやくちゃ高い建物が建てられる事はお解りだと思っ びっくりしたのは周りの近隣商業地域も住居地域も工業地域も全部高度地区がかかっているのに係わらず、この商業地域のみ高度地区がかかっていない。

これは明らかに政治的意図があるとすぐに判ったのであるが、京都市内や奈良県下でもいわゆる用途地域の中で高度地区をかけていないところは無いです。なのに京都の南の一部町村で何故このような事が起

こつたのか良くわからない。じゃあ、どの程度までなら許せるのか、という話をちょっとやってみよう云々事で、3Dを作ってみました。それで、鳳凰堂の正面に立った時、どの程度の高さまでなら見えないのかという事もやってみました。こうしてみるとこの2本はどうしても見えてしまうことがわかった。鳳凰堂の正面から見た時どの高さまでなら大丈夫なのかと見ると、この辺がウィークポイントとなっていることが判った。鳳凰堂の右肩後ろの方は高い建物とか緑が非常に少なく、その結果西の方ですかつ視線が通るようになっておりそこにたまたま2本のマンションが建ったとい事になっている。これを宇治市に伝え、すったもんだしたが、結局だめなんです。

その結果ようやく今年になって条例を作ろうという気運が高まったが、残念ながら法的拘束力を持ったものになりそうにない。将来的に30年~40年経った時に、このマンションが建替えになった時にどうなるかという問題は、相変わらず積み残したままになっている。

< 平等院・宝物館(鳳翔館) >

そんな中で新しいミュージアムを建てる仕事とが平行して行われ、昨年2月に開館したものです。(竣工は一昨年の夏です。)栗生明氏が建築をやリ我々がランドスケープをやった。もちろん最初のボリュームスタディー、配置から全部一緒にやるといスタンスを、我々は貫いていますので、一番最初の全く建物のイメージもできてない段階から一緒に敷地を見たり議論するとい手順を踏んでスタートしている。

これは境内の南端の高台に建物を建てるということになる。ここはちょうど境内の池を巡る園路から大体7mほど高い丘になっていまして、ここに以前から(昭和39年に建てられた鉄筋コンクリート造の入母屋の瓦屋根の載った高床式の宝物館があった。それを壊して新しいミュージアムを建てるとする。

それまでの収蔵庫の床面積は385㎡ぐらいいであったものを一気に2000㎡まで増やす。増やした上で以前の建物が風致地区と琵琶湖国定公園の規制から高さを極力抑える事となる。もちろん鳳凰堂の真近であるから、正面から極力見えないようにするという非常に難しいプログラムが課せられた。国宝の収蔵品点数が60点を超えて70点近くありそれ以外に重要文化財とか非常に歴史的価値の高いものをいっぱい入れると、その中で一番大きいものは4m近い扉を立てて入れるという難しいものがある、天井の高さがどうしても必要となる。しかし、高い建物は建てられないという事で、最初からほぼ考えは固まっていたが、この丘のレベル差を利用して建物を地下に入れてしまおうと考えた。ただ、国宝を収蔵するミュージアム兼収蔵施設が地下

に入った事例は日本にはない。基本的に文化庁は認めない方針でずっときていたようです。今回はそういう問題があるという事で、かなりいろいろと掛け合い、認めてもらった。

一つに調査で水が出ない事という確証を得た事が大きかったが、相変わらず宇治川上流のダムが壊して洪水になったらどうなるかわからないという非常に大きな問題が残っているが、高さを抑えて建物の大半を地下に入れて、上は屋根をかけるだけにしようとした。

屋根をかける時、屋根をどうするかという事は永遠のテーマであるが、当然そこのお寺の建築様式の延長でどうゆものを考えるというのが普通のやり方であるが、だけど、お寺は絶対にそれはしてくれるな、今の時代で与えられている予算で最高のものを作ってくればそれでよい」と言われた。この施設はおそらく50年から100年の間もてばよい。次は次の時代の人間が考えて収蔵庫を建てれば良いという考えである。

講堂はずっと未来永劫に残るべきであるが、宝物を入れる建物は何も昔の史的な様式である必要はまったくない。その時代のベストのものが造られれば一番良いというはっきりした哲学があった。

風致地区でこのような建物を造ると必ず勾配屋根をつけると言われるが、我々は勾配屋根をつけると高さが出て正面から見えてしまうので、フラットルーフでいきたい。しかし、役所は納得しないので、高さの違う3枚屋根を組み合わせて一番高い屋根と一番低い屋根の間の高さのレベルの違いにより勾配屋根であると言おうとした。それで風致の方は切り抜けた。大きな屋根とそれに直行する中位の屋根、さらにそれにもう一回直行する屋根の3枚を重ねるやり方を考えた。

建物は大半が地下に入るので、結構アクロバットな施工現場であった。工事中もなるべく見えないようにという非常に難しい要望があり、しかも敷地がぎりぎりいっぱいであった。施工は大林組です。

最終的にできあがったのは地下から入って上の方に抜ける構成となっている。こちらから入って地下のエントランスの軸線が伸びて突き当たりを右に曲がって、江戸展示室で「梵鐘の間」を通過して鳳凰がある企画展示室で、それから「扉絵の間」を抜けて最後に雲中黒菩薩が26体ある部屋を通過して上に抜けるという一筆書きの動線となっている。「扉絵」の間では、鳳凰堂の東側1/3の原寸の再生となっている。今、現にはまっているのは、この扉絵の模写のコピーである。この動線で何が問題となるかというと、「雨の時の傘」が問題となった。いろいろ討論したが、結局袋を持って入っていただくという形で切り抜けている。今のところは大丈夫となっている。

全部地下にあるので非常に圧迫感があるという事で建設委員会で自然光を入れなさいと言う強いご指導があった。それで、天空光が取れるような11mの高さとなっている。杉板の5cmの本ざねの打ち放しで、試験打ちは10通りくらいやったと思う。栗生さんはこれが良いという事で凹凸も0.75mm付けている。

このように境内からの連続してユージアムの中を通過して上がって、丘の上出るようになっていきます。この辺のあたりの高さは、階段を上りきったところからふっと見ると向こうの方に、はっと見えるような高さとなるように調整を色々したという経緯があります。

ランドスケープ自体はいたってシンプルな作り方をしており、境内の浄土庭園の空間とこの周りの空間を無理なくとにかく繋いでいくとしている。そのため、どのような方法をとったかと云うと、なるべく植物を建築的に扱うこと、それから建物レベルを斜面のランドフォームをうまく受け取る形としている。ここは苔庭であるが、こちらから上がって斜面として一度ピークを作って、さらにもう一度下げると云うように、断絶とか、切れ目がないようなそのような作り方をした。

大きな屋根、中くらいの屋根、小さい屋根の構成にし、水平のラインを非常に強調した建築の状況になっているので、このような刈り込みの処もちょっとづつレベルを下げています。

上に上がってきますと色々な方向に見通しが抜けております。その抜けが例えば建物の屋根の軒先のラインであるとかあるいは壁の垂直のラインであるとかにより切り取られて部分的にぼぼっと見えてくる。360度東西南北どの方向を向いても見えてくる場所が何箇所か作ってあります。

鳳凰堂の持っている屋根の軽快さ、軽さをこの屋根の組み合わせにより、ふうっと浮いた様な、浮遊した様な感覚を栗生さんは最初から意識されていた。さっき申しあげたように、横に風景を切り取ると云う形を取っている。ここまでできますと向こうの山の稜線は見えないですが、縁台の先まで行くと稜線が見えてきます。

新しい門前の広場が計画されましたので、それを一種ウエルカムなスペースとしてど



平等院南門と生け垣が配された門前広場。

の様に設えるかと云うことも私達の仕事の大部分であ

ったのですが、この時は、このお寺の「藤の花」が有名であり5月の連休の直前当たりに満開となります。ここでは、この「藤棚」を思い切って立てて見ようと考えて作ったのがこれです。一年目から藤がちらちら咲いています。

結局、我々が何故ランドスケープのデザインを重要視しなければいけないのかを考えてみますと、自分の幼児からある程度大きくなって、この間の体験と云うものが大きく影響しているんだろーと思います。日本の街がきたないと云われる部分は、やはりその間、その人達が育ってくる環境の中にそういうものが在ったのではないだろうか。それをなんとかして違う方向に向けていくためにはやはり時間が掛かると思います。

私は基本的にはデザイナーにしても、一般の人達にしてもそうなんです。自分が見てきた美しいもの以上のものは作れないと思っています。ですから育った環境はすごく大事なんだと云うように感じています。

例え東北の農山村で育ったり、東京のど真ん中で、大阪の市街地の中で過ごそうが、それは色々な美しいものと出会いがあるはずですが、それをきちっと作って行かないと、これから先、街がきたない状態で別の所に美しいものを作ってくれと云われても無理な話であらうと思っています。

環境の文化とは、そう云った所から時間をかけて醸成されてきているはずですから、今の若い人達とか子供達に対してどれだけきれいなもの、美しいもの(派手なものではなく)をどれだけ準備できるかと云うことが多分100年後の日本の風景に如実に現れてくるんじゃないかと強く感じています。

< 質疑に関して >

街の景観を作る・美しくすると云う時に、どのような取り組み、都市計画等における取り組みはどうか

市民の参加が強意識されていることは大事なことであるが、やはり都市計画の分野、特に法定都市計画の部分では、行政の人々がどれだけ腹をくくるかと云う部分があるんだろーと思いますが、担当している人達がああゆうものを見ても全然醜いとか拙いとか思わないんですね。どうして思わないのだからかと考えると、結局そうゆう育ち方をしてくれて、そうゆう環境を体験してないんじゃないかと云う気がしています。私は、そのところが気になっています。

実は今、奈良県の都市計画のマスタープランを作る委員会の委員をやっていますが、未だに、「景観じゃ食えない」と平気で言う人達が市民の中にも居るし、行政の立場にも居る。確かに「景観じゃ食えない」そうかも知れないが、じゃあ景観が良いとまずいかと云うとがあると思います。景観形成が「規制」と云うように捉

えられている事は非常に問題だと思っています。

例えば、歴史的な景観の問題一つとらえて見ても3段階ぐらいあり一つはきちっと保護をすると云う事は絶対避けては通れない。二つ目は、「調和」と良く云われているところがある。ここまでの話は良くされていると思う。三つ目は「新しいものをそこに付け加えて行く」と云うところについての努力を誰もしていないのではないかと云う

良く「景観形成地区」なんていわれますが、あれは一つの逃げ口上じゃないかと思う。今云った3段階をきちっとやった上での景観形成はあると思うし、調和もあると思う。その辺のめりまりの付け方と云った全体のランドビジョンを云う人もいないし、云える立場も行政の中にも市民運動の中にも作っていないと思う

個別の問題については、色々云うんだけど全体を統括してこうあるべきだと云う理念を申し述べ、そこで議論をする舞台も無ければ、そうゆう権利を持った人も、立場の人もいないと云うのが今の問題と思う

「州浜」が復元されたが、日本のランドスケープの中で欧米的な例が多いが、日本的なランドスケープを持ち込むと云うことはどのように考えたら良いのか。風景を作っている要素を形でと云うことではなくて、伝統的なものと云うのは実は伝統的な形ではなく、伝統的な形をつくる技術の方が大事じゃないかと思う

例えば伝統的な植木屋さんが持っている栽培の管理技術のようなものは、これはすごく残してゆくべきものである。同じように日本庭園的な植栽をしなくても5年10年20年と云う中で、その木をどのように手入れするかと云う技術をそこに適用していくことにより段々日本的なものを醸し出してくる可能性があると思う

例えば、今私は奈良にいまして、平城旧跡があります。平城旧跡の中に朱雀門が出来て、最近色々な建物が復元と云うか出来ています。でもものすごくお金をかけてやっていますね。私はあれ自体を評価する視点はあくまでもそのような伝統的技術が廃れない様に、無くなってしまわないように、その技術を使う機会を作っていることが大事なんであって、昔と似て非なるものをつくるのが評価されるとは思っていない。そこで保全されるべきは技術であって、ものではないと思う

同じように、日本の街をつくり上げている色々な要素のところにも色々な伝統的な技術が使われていると見られるし、使われていかないといけないと思う。街路樹一本の剪定の仕方にとってもそうゆうような技術が使われ、そうゆう技術が蓄積されることによって、私は日本的なものが出てくると期待したい。

だから風景・ランドスケープの場合は、形の事を云う前に、私はそれをつくり上げているプロセスにどう技術が

関与するかと云うところに重点を置いた方が良いと思っている。そういう意味で一時、街路樹の無剪定やそのままにしておいた方が良く云う話が良くあった。

我々が仕事をやる上で、メンテナンスフリーにしてくれと建築家の方から良く言われるんです。特に、屋上庭園とかについて、私達はメンテナンスフリーと云う話が出た段階で、もう緑化は止めましようと思案します。何故かと云うと都市の中で人の手が入らない植物の使い方と云うのは、私は多分だめなんじゃないか思います。そこにお金をかけてきちっと維持管理すると云う技術がつけられて始めて文化に成ると思っています。

勿論そこでは環境負荷の低減とか云う問題がありますが。私は屋上とかの、そのようなところの緑化が環境負荷の低減に貢献するのか疑問があり、緑化をそういうものの隠れみのに使われることは避けたい。やる以上はやはり人の手がきちっと入った緑の空間を作ることが筋だろうと思っています。

ニュータウンの例の水路沿いの草花は育っていますか。

なくなっているところもあれば、さらに良くなっているところもあります。それはそこに関わっている個人の意識の問題で、中景でああゆうことをやるのは止めようとしたのは、実は中景の部分は人の意識がいき難い、人が手を出したくても出し難い部分だと私は思っています。自分の家の玄関からおそらく何メートルとか云われる範囲とかはきれいに手入れすることがあるかも知れないが、それを離れてしまうとやり難いと云う部分が出てくるだろうと思う。そういうスケールに広がる今度中は景の造り込みが要求されることとなる。

集合住宅の中では、常々云ってきたつもりであり、そういう部分は案の定うまくゆかないケースがあるようである。ただ近いところは比較的うまくいっている。そこでは個人の資質が大きいかと思う。

一方集合住宅の場合、入居者を作る側は選べないと云うように非常に難しい問題があります。今、東京の都心で色々な新しいタイプの集合住宅が出来てきて、実はこういう使い方をして欲しいと云う事を作り手の側で色々考えてはいます。ただそういう作り手を選ぶと云うことを供給する側が出来ないと云う社会的な制約があると云うジレンマが起っています。

ただ、私は供給者が住まい手を選ぶと云うこともありかなと最近思うようになっています。そういうことの中で、始めてルールのようなものを守るようなことが出来るんじゃないか、例えば100戸と云う供給の中で、例えば2戸だけは、すごくパブリックなところに面していて、住戸があって、その周りをきちっと管理するような人を得るとか、面接してそのようなメンタリティを持った人に入って

もらうとか、何か、そういうことがあると思う。

特に都心に住まいが回帰している状況の中では、既存のコミュニティがあるわけですから、そこにどうはまり込むと云うことも含めた在り方、今の屋外空間の管理の仕方みたいについても直接つながってくるように思います。

先ほど自分の見てきたもの以上の美しいものは作れないとい話でしたが、そうすると私達デザインを学んで、人類として事業をどんどん考えているわけの筈なんです、結果的に進化しないで退化していることになるんですかね。

いや、必ずしもそうじゃないんじゃないでしょうか。色々な新しい技術を使って、我々は先輩達が見れなかったものも見ていると思うし、だから肉眼で必ずしも見れなかったものでも見ていることもあるし、そう云ったものがきっかけになることもあるでしょう。

それが反映されるとすごく良くなって、その厚みとかその多様性みたいなものがあることがすごく大事なことなんじゃないかと思う。つまり、ものを見たり、ものを感じたりするデバイスと云うかメディアと云うか、その多様性は20年前、30年前と比べると比べものがないくらいになっており、そう云ったところで体験したものがまた違う形で反映されることは凄いことだと思う。

例えば、人が作ったものでも、そこで自分が何かを感じたもので、美しいものであれば自分が見た美しいものの範囲内のものとなる。とすると人が作ったものからは新しい美しいものが発見できると思われる。

それは例えば自然の環境だけじゃなくて、映画にしても、織物にしても、絵でもそうだろうし色々なものがあるだろうと思う。むしろ大半が他人の作ったものじゃないかと思う。どこかに行って、ほんとうに生の自然が体験できる人は今、そんなに沢山いませんよね。それこそかつての植村直巳さんみたいに体験できる人はほとんどいない。

例えば写真を見るにしても、或人の手を通して出てきているものだから、必ずそこにその人の意図がなんらかの形で反映されているように私は思うんですけど、私がちょっと云いたかったことですが、誤解を恐れずに云うとすると、人々が体験してきたものとか見てきたものは我々の中に色々な形で蓄積している筈ですよ。だから直ぐに思い出せと云っても思い出せるのは極僅かではなく、ほとんどが無意識の中に沈み込んでいるんですけども、それが何かのきっかけでふっと出てくるのが多分あると思うんですが、そこが大事なんじゃないかと思っているし、自分がどれくらい蓄積しているなんて誰も判らないと思います。